

原子力災害に係る復興支援からの教訓

Lessons from restoration support related to nuclear disasters

吉田 浩二

Koji YOSHIDA

長崎大学大学院医歯薬学総合研究科

Nagasaki University Graduate School of Biomedical Sciences

2011年3月の福島第一原子力発電所の事故は、これまでの「安全神話」を嘲笑うかのように、環境中に放射性物質を拡散させ、放射能汚染が広がるといった緊急事態となった。国中が原子力災害の猛威に触れ、放射線の人体影響を恐れ、福島県民は避難を余儀なくされた。医療および保健従事者は、放射線の知識の有無にかかわらず対応を迫られた。

私は、長崎大学病院からの医療支援として、発災から3日後の3月14日に福島県に赴き、支援活動を開始した¹⁾。また、平成25年9月からは福島県立医科大学の災害医療総合学習センターに籍を移し、教育活動や被災地の復興支援に携わった。

私が所属した災害医療総合学習センターは、震災および原子力災害により被害を受けた県内医療体制の再生や放射線の影響などにかかわる教育、災害医療人の育成などを目的とし、平成24年に設置されたセンターであり、私が求める被災地支援や教育活動と合致していた。私は医療支援で福島県を訪れている際に、被災地の看護職の苦悩を目の当たりにした。そして、赴任する際には、震災当初から自身の健康も顧みず、地域住民の健康増進や放射線不安の軽減のために日々奮闘している地元保健師を支えたいと思い、自らに「看護職の放射線知識の向上、特に保健師支援」というテーマを課した。県内保健師へのアンケート調査を通して、不安やメンタルヘルスの現状を明らかにし、それを基にした保健師支援事業を展開してきた^{2,3)}。私自身、県内保健師に多く接し、放射線の知識の向上にも意識して関わってきたつもりではあったが、県内保健師の役に立つことができたかの評価は難しいところである。

今回のシンポジウムを通して、原子力災害の影響は大きく、まだまだ復興過程であると強く感じた。私ができるは限られているが、福島県での貴重な経験を活かしながら、教育の視点から復興をサポートし、看護職が安心して住民や患者に向き合える放射線看護の教育体制づくりに関わっていきたい。

引用文献

- 1) 吉田浩二, 中島香菜美, 廣島陽子, 他. 東京電力福島第1原子力発電所事故による放射線汚染等に対する緊急被ばく医療: 放射線看護の専門看護師を目指した取り組みと課題. 日本放射線看護学会誌. 2013, 1(1). 37-42.
- 2) Yoshida K, Orita M, Goto A, et al. Radiation-related anxiety among public health nurses in the Fukushima Prefecture after the accident at the Fukushima Daiichi Nuclear Power Station: A cross-sectional study. *BMJ Open*. 2016, 6(10). e013564 1-6.
- 3) 吉田浩二, 新川哲子, 浦田秀子, 他. 福島第一原子力発電所事故後における福島県内保健師のメンタルヘルス: ストレス対処能力からの一考察. 日本放射線看護学会誌. 2017, 5(1). 31-38.